

平成 29 年度 第 1 回 教育課程編成委員会 報告書

1. 日時：平成 29 年 10 月 17 日（火）16 時 00 分～17 時 00 分
2. 場所：日本福祉教育専門学校 高田校舎 221 教室
3. 出席者：委員 松山 慎司（社会福祉法人西東京市社会福祉協議会 専門員）
委員 渡辺 裕介（公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会）
委員 小内 仁子（東京都言語聴覚士会 学術局部員）
委員 中山 剛志（言語聴覚療法学科 学科長）
事務局 寺澤 美彦（教務副部長）
事務局 鈴木 達也（教務課）

4. 議事

冒頭に寺澤より平成 29 年度入学者数の説明をおこない、各学科の退学状況を説明した。

各学科の退学理由について

ソーシャル・ケア学科

- ・ソーシャル・ケア学科は社会福祉士と介護福祉士のダブル資格取得を目指せる 4 年制学科だが、入学する学生は社会福祉士の資格取得を目指す学生が多く、入学後に始まる介護の学習が嫌になり退学してしまうケースがあった。（寺澤）

介護福祉学科の特徴

- ・職業訓練生は、在学中に就職が決まった時点で退学するケースがある。（寺澤）
- ・職業訓練生については生活がかかっているためなんとも言えないが、中長期的に考えて資格取得まで努力するべきではないか。介護福祉士の資格取得後、ケアマネージャーへのステップアップを目指させてはどうか。（松山）
- ・学力不振やモチベーションの低下については指導できるが、就職が決まって退学する学生への指導は極めて難しい。（鈴木）
- ・職業訓練生については、入学試験の段階で 2 年間勉強する意志と資格取得について確認する必要がある（鈴木）

社会福祉学科

- ・数年前までは、手話と音楽をたくさん学べると思って入学した学生が、実際には社会福祉の勉強が多いことでモチベーションが低下し、退学するケースがあった。現在は、卒業後は高齢者施設で働くものだと思っていた学生が、障がい者施設での勤務を想定していなく、退学するパターンがある。（寺澤）
- ・これからは地域包括ケアシステムや地域共生社会へ向けてシフトしている所であり、高齢者、子ども、障害者の垣根を取り払う時代の流れとなっているので、その点を学生に強く伝えて欲しい。（松山）
- ・入学後のミスマッチを防ぐためにも、広報活動を工夫する必要がある（寺澤）
- ・今後、音楽療法のニーズは増えることが予想される。早期に分野を決めるのではなく、いろいろな対象者に支援が出来るということを学ぶ場として、学業を進めていただきたい（松山）

社会福祉士養成学科

- ・目的意識が高く、退学する学生が少ない。国家試験合格率も常に高い。決め細やかな指導、教員とのかかわりが深いように感じる。学科でクラス通信を作成しており、サポートしている。（寺澤）
- ・学生の目的意識がしっかりとしている為、クラスがまとまりやすいのではないか。（松山）

精神保健福祉士養成学科

- ・問題がある学生が多いものの、退学までにはいたっていない。社会福祉士養成学科同様、目的意識が高いためと考えられる。（寺澤）

精神保健福祉士養成科

- ・精神的に不安定な学生が悪化して退学するケースがある。（寺澤）
- ・夜間部は通信教育と競合するため、学生が集まらないのではないかと。募集が少ない中で選考するため、精神的に不安定な学生が入学することが予想できる。（松山）

言語聴覚療学科

- ・原因のひとつとしては、医療系で働くことの認識があまりなく、聞こえない方や話せない方の心理的サポートとしての認識で入学してくる為、入学後のギャップに戸惑ってしまい、退学する学生がいる。（中山）
- ・学校説明会や入試の時点で職業理解の必要性を強く説明し、ミスマッチを減らす努力をしている。
- ・取り組みの結果、一昨年度は退学率を下げることができた。（中山）
- ・学生個別に到達目標を決めることで、退学率抑制に努めている。（中山）
- ・心理職との取り違いで入学する学生がいるという話だが、他の医療職と比較して入学する方はいるのか（松山）
- ・何らかの理由でリハビリテーションに接した方がリハビリに興味を持ち、理学療法・作業療法と言語聴覚療法を比較して入学してくることはあるが、例えば理学療法士と言語聴覚士を比較する学生はいない。（中山）

5. おわりに

委員の意見を基に、今後も学校運営に対して改善を図っていきたい。今年度第2回の委員会は、3月の開催を予定している。

以上